

てこな・ミュージック・ジャーナル

～20世紀の音楽～ 前衛音楽

冒険する音楽家たち

もう12月です。今年は本当に目まぐるしく、とりわけ経済変動に振り回されました。7月フランスに行ったとき、ユーロは172円でした。それが10月末には118円。この12月号が出るころにはどうなっているのでしょうか？世の中に不安材料が多いとき、コンサートには何が求められるのでしょうか？このような世情を反映してか、心に安らぎをたもみ名曲演奏会が多くなったように思います。そんな事を考えていたら今から半世紀近く前、1950年代、まさに高度経済成長期、実験的音楽が注目と話題を集めた時代を思い出しました。市川市の文化芸術市民サポーターの方々の中にもいわゆる「団塊の世代」が決して少なくありません。朝から夜遅くまで働く大人、その一方に反体制の学生運動、そういった世の風潮が芸術の世界にも波及していたのです。

前衛芸術って何？

前衛、懐かしい響きです。この言葉はすっかり死語になってしまったかもしれません。世の中が「理解しにくいもの」に関心を表明する余裕、エネルギーを失くしてしまっているからでしょう。でも前衛音楽、すなわち新しく奇抜な音楽をすることを目標に掲げる一団が確かに数十年前にはいたのです。彼らの音楽は従来のものとは違う刺激があって、音響的に、構想的に耳新しく創作者の意図が強く打ち出されたものでした。

一回性の音楽

いわゆる楽譜というものは綴じられていて、ページ番号の少ないものから順に演奏していくのが普通です。ところがこの常識を覆したのが、前衛の音楽家たちです。楽譜を舞台上にばらばらに置き、奏者がその日の気分が勝手に取り上げては、現場で音楽を作るといってもありました。ただし音楽とは本来、一回性の芸術だと言えます。楽譜があっても、それは演奏の道付けであって、音楽表現は奏者次第なのです。だから古典派もロマン派の音楽も何度でも演奏され、指揮者によって、奏者によって、厳密に言えば、毎回違う音楽が創造されるということになります。数十年前の現象である「前衛音楽」はまさに「一回性」という音楽の本質を突いたもの、「予測可能な展開」すなわち「終止への方向性」が感じられない音楽、すなわち安心感のない音楽創造でした。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

出発点はストラヴィンスキー

前衛の先頭に立ったのがロシアの音楽家ストラヴィンスキーです。「春の祭典」が発表されたとき会場はブーイングの嵐でした。時は20世紀初頭1913年パリ、不協和音、強烈なリズムで伝統と対立、調性を破壊し変則的で攻撃的な大音響、脅迫的な不協和音の羅列。音楽界への挑戦、暴挙だと、批評家たちはこぞって批判的な言葉を書き連ねました。

現代音楽研究所

今となってはストラヴィンスキーの「春の祭典」はすでに古典です。ドイツ中部の都市ダルムシュタットに現代音楽研究所の拠点ができたのは1940年代ですが、現在もなお、隔年に非常に観念的な音楽祭が続けられています。そこに参加した音楽家にジョン・ケージがいます。初演は別の場所ですが、ジョン・ケージの「4分33秒」は、人々を唖然とさせました。舞台の上にはピアノ。そこにピアニストが出てくると、楽器の前でまさに4分33秒、ただじっと座っています。聴衆はだんだんざわざわしてきて、コンサート会場の外の音も聞こえてきます。さまざまな音がピアノの代わりとなる、まさに切り取られた4分33秒という「偶然性の音楽」というコンセプトを投げかけて大評判となりました。その他に、不協和音どころか大変な騒音、鍵盤を肘や手のひらでまとめてたたき、音楽というよりも衝撃的音響でセッションを巻き起こしたシュトック・ハウゼンも有名です。

面白いミニマルミュージック

聴衆を緊張させ、落ち着かなくさせるこのような「音楽」は刺激的ではありませんが、騒音でしかない一般的な感覚には受け入れられませんでした。予想不可能な「音楽」に心の安らぎは求められなく、結局、一部の人のをぞいて、徐々に聴衆は離れてしまいました。でも実験的な音楽の中でも支持されたものもあります。それがミニマルミュージックです。同じフレーズを繰り返しながら、徐々に音を増やし、音楽を複雑にしていくというものです。繰り返すフレーズがあるので、筋道を理解できるからでしょうか。この分野の作曲家スティーブ・ライヒは今も人気があります。

「4分33秒」は誰をも現代音楽演奏家に？

一度ジョン・ケージの「4分33秒」、やってみたいと思われませんか？理由は簡単です。ピアノの前にいればいいのですから。聴衆は自由に話し、それでもピアノの前にただ座る演奏家から目が離せないかもしれません。音楽芸術の一回性を会場にいる人たちで協力して生み出すというジョン・ケージ体験。音楽に冒険を求めた数十年前、そんな時代を思い出してみる、そして音楽とは何かを考えるというのも、たまには興味深いことかもしれません。